

キッチンの様子を話題に遠隔地の家族をつなぐ 雑談エージェントの提案

佐藤 晃佑

大島 直樹

東京電機大学情報環境学部情報環境学科

1. はじめに

離れて暮らす家族は遠慮や生活スタイルの違いから親密なコミュニケーションに発展する機会が少ない。そこで、存在感という最小限の情報のみをプライバシーに配慮して伝え合う支援システムが開発されているが、密なコミュニケーションへの発展を想定するものではない[1]。本研究では遠隔地家族間のより親密なコミュニケーションを促進するシステム(チャットボット)を構想している。ここではデザイン思考に基づき発想したコンセプトの例を示し、Wizard of OZ(WOZ)手法によるコンセプト検証の結果について報告する。

2. コンセプト

毎日の料理を話題とすることでより親密なコミュニケーションが引きだされると考えた。遠隔地に暮らす2家族それぞれのキッチンの音情報を家族のスマートフォン上のグループチャットに2体のボットが交替に発言する(図1)。

3. コンセプトの検証

実験協力者は主婦50歳(筆者の母親)である。実験者(筆者:22歳男性)が自宅で料理をする度に、キッチン音情報に関する話題を2体のエージェントに雑談させた(実験者によるWOZ操作)。

4. 結果

実験前のコミュニケーション頻度は月に数回、用事に関することをチャット上で連絡する程度であった。一方、実験後は毎日連絡を取っていた(図2)。また、料理以外の話題に発展した。事後インタビューでは「2体のエージェントのやりとりが面白くて携帯を見る頻度が増加した」、「料理は毎日メニューが変わり、プライバシーも低いので話題に適している」等の意見を得た。

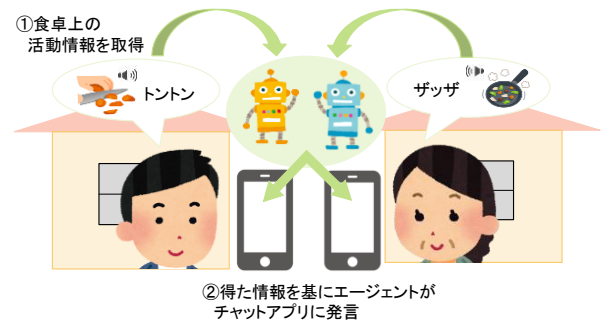


図1. システムイメージ



図2. 実験中のチャット履歴

5. まとめと今後の展望

WOZ実験を用いたコンセプト検証により提案システムの効果を擬似的に体験した。提案システムは新たな会話のきっかけや話題の提供につながるためより親密なコミュニケーションを引きだすと考えるが、長期間利用した場合の効果は未検討である。今後はこれらのアイデアを具体化するためのプラットフォームを構築し、長期間での使用に耐えうる実機を試作して実証的な実験フェーズに移る。

参考文献

- [1] 大島直樹, 福島俊太郎, 武川直樹: グループチャット上に家族の活動状況をつぶやくエージェント達の会話デザイン